大和名所圖會 六

ル 4
236
6

臨 236 6

若山 水戸藩藩 書林

金毘羅參詣名所圖會卷之六

目錄

頼之八幡宮に勝利を祈る圖
神明宮
神馬舍
石鳥居
行宮
大天神社
高松鎮城
新川
弘法大師加持水
石清水の宮
隨神門
中の鳥居
道祖神の社
神樂殿神樂舍
松島
寫元塩濱
梵子石
石清尾本宮
夛宝塔
御供所
雨師風伯の社
阿弥陀堂
訶梨帝母の社
阿萬の茶屋
相引の潮
不喰梨の樹
神樂殿
藥師堂
回廊　反橋
放生川
一の鳥居
石橋　石鳥居
春日川
屋島寺前板碑
畳石

碧水藏書

石鍾乳　屋島寺　御影堂　釈迦堂
千躰堂　中門　鐘楼　二王門　茶堂　獅々の嶺巖
仙人窟　鉢の淵　血の池　屋島山
屋島の浦　屋嶋の古城　甕淵の社　甕底の古蹟
影向墳　羊礼高松の松原　次信の碑　安徳天皇の社
檀の浦　屋島の内裏之古趾　例寄の堂　惣門の古趾
宗高祈石　同駒立石　扇の的の圖　景清鞠弓の古趾
景清勇力の圖　小橋太水練の古趾　同　高名の圖　義経弓流の古蹟
義経弓握の圖　盛嗣宗行が鞠と引切る圖　黄牛崎
佐藤次信の墓　次信が霊空信が夢中に現る圖　大夫里の馬の墳
武礼高松の柴山　瓜生山　鞍掛松

高松左馬之助墓　行忠摩守墓　唐人彈正墓　喜岡の古城
古高松の郷　平家蟹　王之墓　王屋敷
長刀泉　茉切地蔵　義経野陣の趾　六萬寺の西趾
辨慶野陣小汁と煮る圖　浦島下知之記

金六ノ目二

石清尾宮　高松の府の神の方ニ向フ一府中の生土神ゝ此山と亀尾山と呼ビ
石清水の名と合して石清尾と称ス

本社　祭神一座　應神天皇　東面山上ニ向フ

幣殿　本社ニ次ク　拜殿　燈道の下ニ向フ　神楽殿御牘所　本社の階下右の傍ニ有リ

神明宮　本社の左山上ニ向フ　天照皇太神宮と祭ル　石清水宮　神明宮の左ニ有リ　多寶塔　神明宮の後の山上ニ在リ細川右馬頭頼之の建立

薬師堂　磴道の下南の傍ニ向フ　瑠璃光佛と安ス弘法大師作　神馬舍　石段の下北の傍ニ向フ　水戸郷御寄附納む

隨神門　正面東ニ向フ　廻廊　隨身門の左右ニ連る　御供所　廻廊の傍ニ有リ

反橋　門前ニ細き川ニ向フ　是ニ架ス　反橋の前ニ向フ右ニ下乗の石あり左の傍僧坊ニ向フ　社頭ニ献燈の石燈籠未社ニ多シ

石鳥居　馬場の東西行程凡十町余道幅凡廿間余左右人家軒を連ル傍ニ松の大樹多シ右の方の寺を福壽院ト云　阿弥陀院ト号ス

中ノ鳥居　同馬場ニ向フ　雨師風伯社　鳥居の南の傍ニ有リ

放生川　二の鳥居の向ふニ向フ　行宮　放生川の東北の傍ニ向フ前の地廣く芝生ス
石橋を架ス　例祭の御旅所なり

金六八一

道祖神社　左の傍ニ向フ門出の神ゝ以
猿田彦命と称ス　馬場の右ニ向フ　南二ヶ寺　観音寺　覺王寺　北二ヶ寺　西願寺　淨光院　圓備寺ト云フ

阿弥陀堂

一之鳥居　此所を茶屋町と以

八幡宮本紀

當社ハ延喜十八年八幡大神香川郡亀の尾山ニ鎮座せんと詔宣ヲ給ひしる
時ニ山上ニ光氣ありて雲間ニかゝる溪曲妙音と發ス是ニよつて國司山の
前ニ神殿を建て石清水八幡宮と勧請ス石清尾八幡宮と号ス奉つる
ゆゑハ石清水と亀尾山の両名を取て名付るとゝ也
例祭八月十五日放生會執行ス又四月三日ニ祭礼ありて是を俗ニ右馬頭
祭といひ甚日の市と右馬頭市と号ス其賑ハしさ言語ニ絶ス此日
右馬頭祭といふ文貞治元年細川右馬頭頼之相模守清氏と合戰の
時深く當社八幡宮ニ祈願して神助を乞れ霊験掲焉ニ顕ハ清

神明宮
本社
拝殿
神楽所
薬師堂
銀杏木

石清尾八幡宮
神輿舎
手水
井戸
御供所
薩摩門
廻廊
反り橋

氏と亡し同二年藤州の河野を征伐の時も即當社に詣で合戰勝利を得へ
支て祈り深く敬信して出陣に然る小霊驗掲焉〳〵河野終小降戰
そるに能に敗軍に頼之歌歌を唱て稍〳〵香河郡笑原の郷に来
て戰馬戰車の行粧を整當社へ参詣あつて五願成就の拜謝とす臨
時の祭祀を修行して神慮を清しめ給ふ〳〵四月二日〳〵故に今尚例年
卯月二日臨時の祭祀行はる是を俗小右馬頭の祭〳〵ひ賑ひと右馬頭市と号
に往昔八甲冑弓矢を帯し騎馬を打て五十騎二十騎列をたゞして神前
を渡るとも後世其例絶てなし〳〵で頼之此故を以て社頭を修造し
末社に至るまで結構し神領を附て社人小を形の如く備ふ今尚邦君より修
造ありて社頭益義観かりそ神威威隆して利生凡民の上小及ぶ〳〵
祭礼の行粧市の賑ひ小の國ハ〳〵〳〵拾遺の篇小出に

又傳云細川頼之河野を攻る時先當社小奉幣し神樂を奏せらる凡時ら
人公廊廟の結賀薪の言を聞ら〳〵権謀の第一ら〳〵として拙言願ら〳〵丹
精を抽んで祈らをしに忽ち神殿の扉鳴動し山嶺一番宮中に飛来り
東西小別をて戰ひるゞ西の方まけ東の方勝て是を追ち〳〵に頼之信心
感応いつて宿願〳〵に開けわ〳〵嬉び馬物具戰具を用意し阿波土佐筑後二
箇國の軍勢を引率し伊豫國に向ひて河野を亡ぼ終に國を平治せ〳〵ぬ
大天神社　石清尾の馬場の半途より左へ高松の天神〳〵に
本社　祭神　天満大自在天神　神樂所　御供所　神輿舍　社頭の左右
詞梨　常毋社　境内西の傍小ひ　表門　正面南向　鳥居　同上　石橋　同前の池
其始め今の稲荷明神の社地にいの〳〵と生駒一正公此地小移に則雑賀氏の
城跡ひ〳〵〳〵で社壇の壯観美を尽せり

高松鎮城　香川東郡にあり往昔御城下なりしと前八輪島といひし島なりしを
御城八北の濱邊にあり其御要害の結構八下民の言べきにあらず御城邊ハ武家
方の御屋敷雲霞の如くにして市中八商家職家軒を並べて交易を業とす海
ふ湊の濱方にハ數多の入船所せゝ迫纜を繫ぎ積入るあり揚るあり賑ひ
夏朝暮とかくべく沖の方にハ女木島男木島直嶋小西にハ白峯の山つゞく東
八島南八阿州の山くまで眺望の風景の勝地國中第一の繁花なる中に佛
閣許多ありて何をも壯觀端麗なり事繁きを以て多畧し拾遺の篇に
松嶋　御城下の傍小なる一村なり此所旅駕屋多
阿萬茶屋　春日川　新川　いづくも高松より八島へ通る街道なり
浮元村　仁木村とも書り八島山の西南の麓なる數町の間塩濱あり国中塩濱多しといへども
此地の塩を最上とす播州赤穂に劣らず
相引の潮　同村にあり八島山の南麓なり今八川となりて橋を渡せり相引川もまた
東西にめぐる川の中間なり

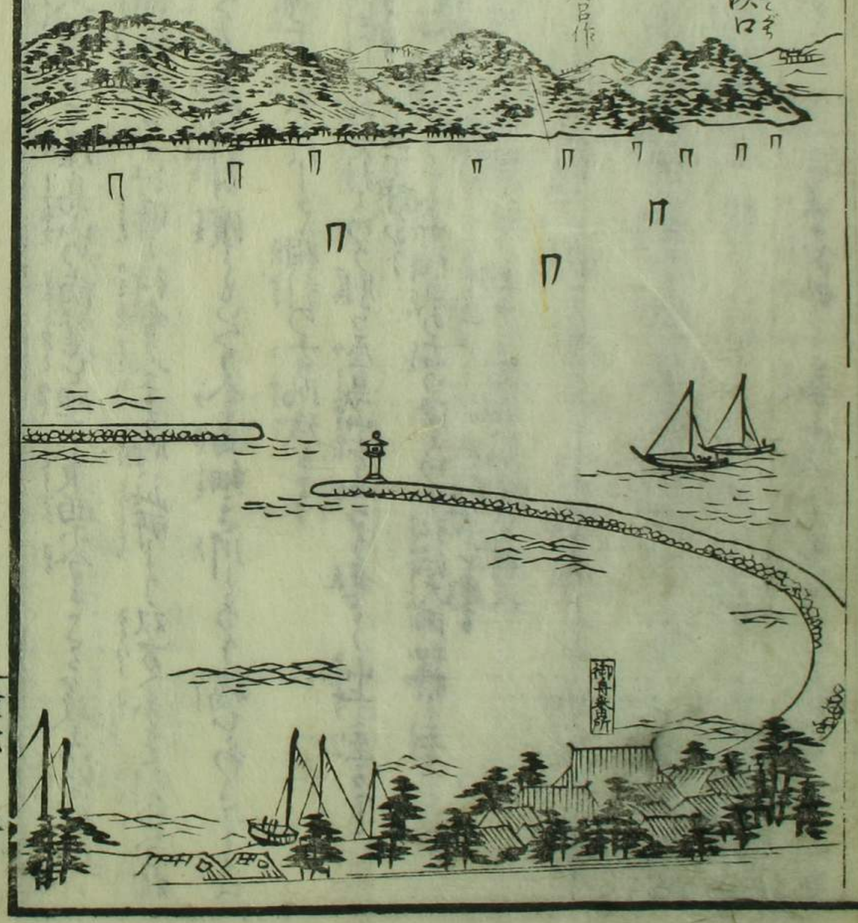
往昔此地八海にして屋島山の南麓を廻り東西小谷をなすが故に潮満る時
東西より潮寄来りて大の所に行會入干る時八此所より双方へ分れ引て相
引の濱となる干潟相引の濱ともいふ今尚細き川となり橋をわたす
よも汐の満干八変なくして相引の古風殘れり
屋島寺前札所　浮元村より則ち屋島山上なり是より山上に至ること
十五丁許り
弘法大師加持水　麓より十余町往来の右の傍にあり弘法大師加持一玉ふと紀
加持水の右の傍にあり丈余の盤石小阿字と鐫
梵字石　並びに石の地藏尊を建る
不喰梨樹　浮元より八島山に登る半腹にあり今八其樹なきに傍に嫩木一本生
傳云里俗爲業に此樹に登りて梨の實を採ること居なり折々旅
僧来りて其梨の實一顆たまはれとこふ里人慣貪りて開会山實八
食とるものにあらざれば恰も木石の如しと者に旅僧爲方なくして行さるなり里

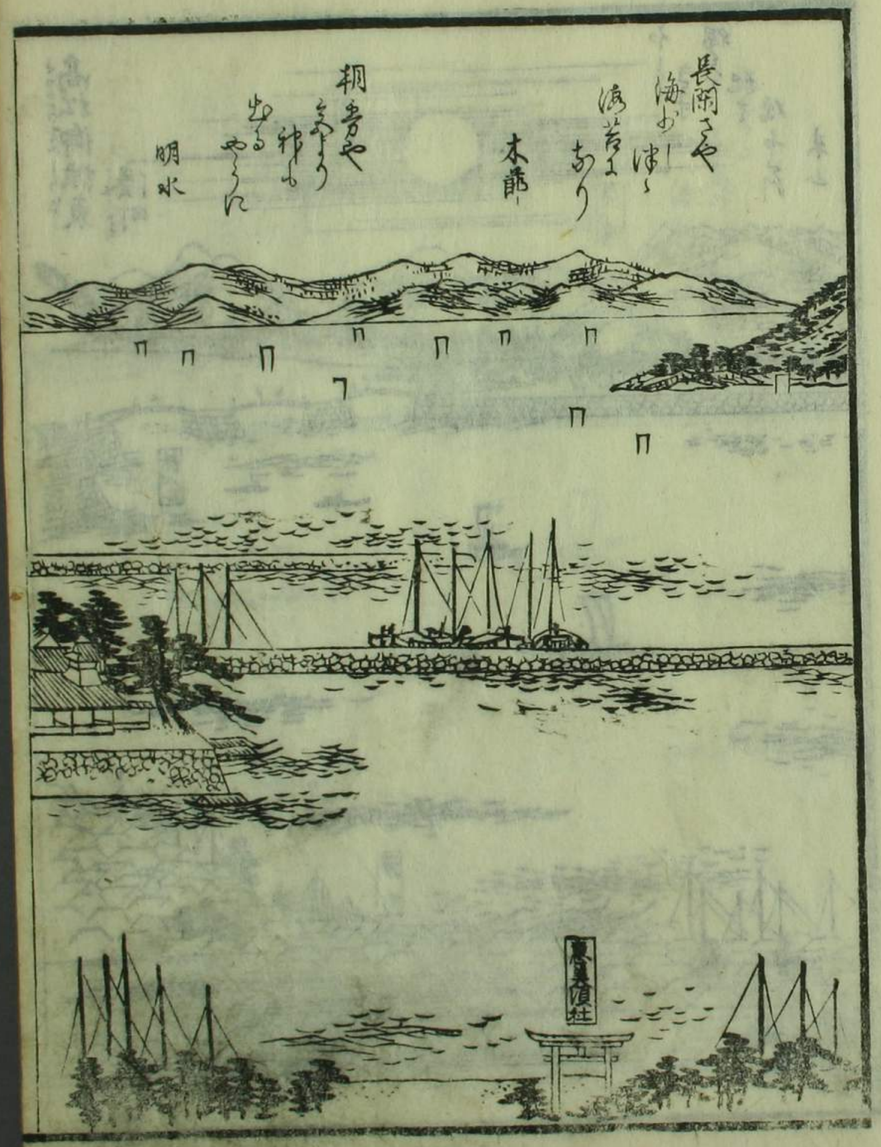
高松鎮城湊口

萬葉集

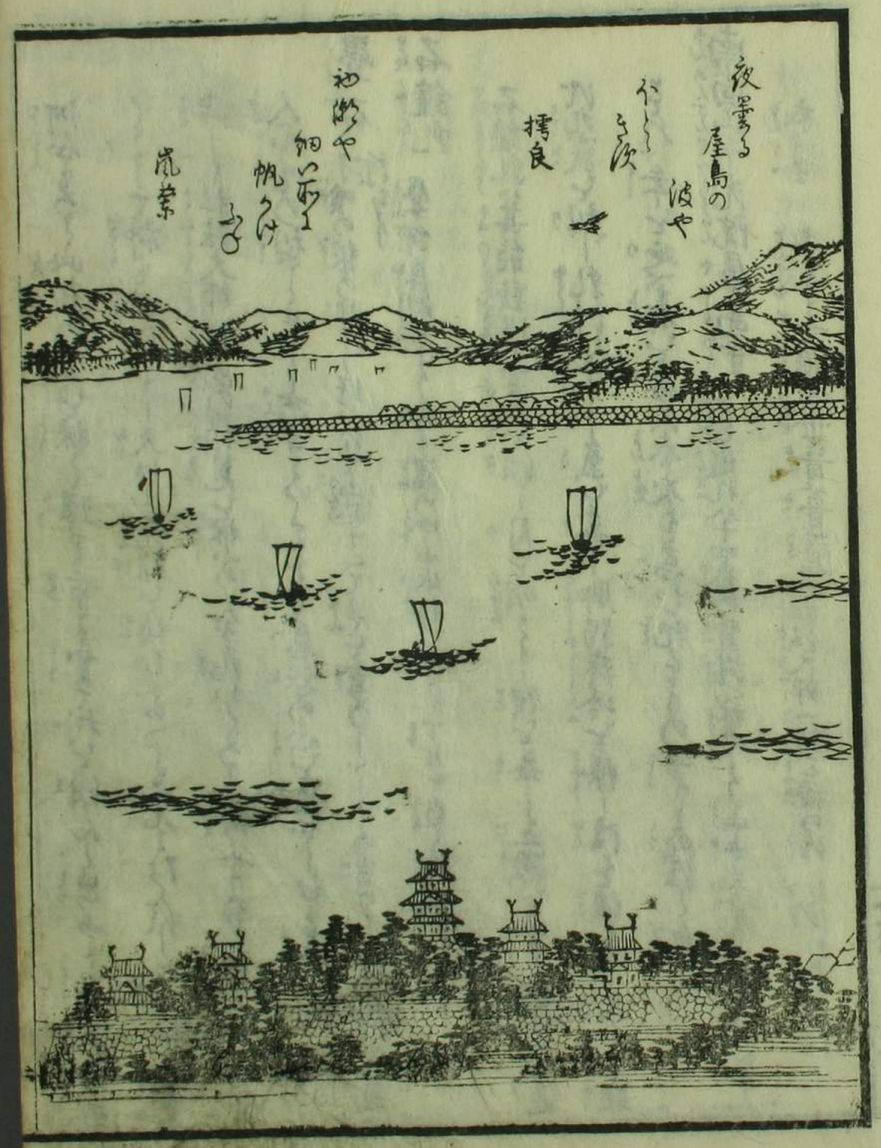
柿本朝臣人麻呂作

玉藻吉潟岐
國者国柄加
雖見不飽神
柄加幾許貴
寸六地日月
與共滿將行
神乃御面跡
次來





高松御城東
湊町
屋嶋
新バシ
湊町


夜雲る
屋島の
波や
撐良
初潮や
細い雨
帆
虎常

何心もなく此梨の実を採て帰て市に賣て利を得んと思ひ忘れ木の如
くにして御も味ひもなく大ひに先非を悔むにのぐも先にたゝれて止めぐを見
正しく弘法大師賤民の邪見を救ふんが為かくの如き給ひのさそさる行に世
人不喰の梨と号し末世にいたるまで慈悲の心を生ぜしむる基なり

畳石 不喰の梨の地より出ぬ故なり山路すべてあるを重〇しくの岩のあり至つその縦
石鐘乳 畳石の其洞穴より出る窟の中に氷柱のごとく下りて白きこと雪のごと

石鐘乳は其能欵逆上氣を治し目を明らかにし精を益し五臓を安し百節を通
じ九竅を利し乳汁を下し氣を益し脚弱疼冷を療し陰を強くし久しく服
すれば年を延べ齢を益す参水を忘む把をとりの長くなるなり

南面山千光院屋島寺 四国遍れ八十四番の霊場なり山上に至ること凡七町
本尊 千手千眼観世音菩薩 弘法大師一刻二禮の作 座像の長二尺

御影堂　本堂の左の傍に有り弘法大師を安ス

釈迦堂　本堂の左の向に西面に建釈尊を安ス

千躰堂　釈迦堂の左山の崖に有り　観音の尊像千躰を安置ス
萬治四辛丑年五月十八日　邦君信頼重公御建立

鐘楼　千躰堂の右の向に有り　中門　本堂の正面に有り四天王を安ス

二王門　中門の向に正面に有り　茶堂　本堂の右の向に東向

本坊方丈客殿庫裡本堂の右の傍に列せり　當山の縁起源平合戦の形勢を画き懸物二幅を藏ス乞て任せて拜見せしむ至つて古画

獅子之嶺巖　寺を去事二丁許西に有り日想観の地なり云此地より八ケ国を眺望して至つて絶景なり故に八国が峯と名付る

仙人窟　北の山中に入ること一里ばかり有往昔仙人ありて住し所と云

鉢ノ淵　右の峯より乾の方八丁許海中に有り鑑真将来の鉢を沉めし跡とぞ

血之池　本坊を去る華一丁許に有り傳云源平の合戦に血刀を洗いし池なりとぞ

當寺人皇四十六代孝謙天皇の御宇天平勝宝六年唐土揚州の鑑真和尚日本に渡
淑と聞く来朝の時船中に於て遥に此山に瑞光の立を見て船を海岸に寄せ
せ山に登臨して其形勢を観察ス時に二人の老翁鳩の杖をつき出現して云く
此山いまだ人間の境にあらず天仙遊化の霊所なり今此地を足下に授
くべし佛法を興隆して凡夫の患難を救い給へといひつゝ忽然として形失ぬ鑑真
こゝを神秀の地なりと大に悦び鉢を此山に遺して印を帝都に上り
天皇に謁ス帝志厚く崇信し玉い東大寺に住せしめ後大殿の西に戒壇院を構
ひ戒法を行ひ給ふ此時屋島の奇瑞を奏ス帝詔して屋島山と鑑真
に授け戒律の境に給ふ鑑真とゝもに我弟子空鉢恵海律師に法
門基せしむ鑑真所持の普賢菩薩の像を置法華および華厳経の普賢
行願品を貼し時に聖二天十羅刹女出現して種々の異

り幾ばくも思ひ五十七年を歴て去らまくぞ然して風紀高く
布て招提寺と創めて後佛金尼利三粒あり〻び給ふ菩提樹の孫數も送まつり其後
宝亀五年弘法大師誕生まし〻成長の後空鉢の門に入て戒を受玉ふ故に空の
字を附給ふ而して當山に来て千手千眼の大悲の像を一刻二礼して仰せ
給ひて〻〻安置し寺を千光院と称し直言秘密の道場と〻給ふ〻

元亨釈書巻第一傳智一之一曰
釋鑑真八世姓淳于氏三テ唐土揚州ノ江陽懸ノ人ナリ齊ノ國ノ辨士ダル淳
于髡カ後裔ダリ中略唐玄宗天宝十二年ノ冬副使伴古ガ船ニ乗テ思ノマ〻ニ
海上ヲ凌ギ天平勝寶六年甲午ノ正月十二日太宰府着テ程ナク四月帝
都ニ入表ヲ上テ其將来セル物ヲ献上セラルト云〻

佛祖統紀五十四曰玄宗日本國沙門栄睿至揚州律師鑒真与睿附船
而去王迎労之館毗盧殿請授歸戒日本律學始此

屋島山　此山の形遠方より眺む時は恰も家屋の如し故に号〻

屋島浦　山の麓の海をいふ

屋島ノ古城　人皇三十九代天智天皇の御宇此地に城を築き給ふ

日本書紀曰　天智天皇八年十一月築讃吉国山田郡屋嶋城

壥底社　屋島山の麓にあり木太村新川の下にあ〻る

祭神三座　一　牛頭天王　素盞嗚尊　二　總光天皇　牛頭天皇の御子にして大歳神なり
三　道祖神　猿田彦命

傳云正暦元年寅八月八日海中に樓の一の蠣れ漂ひ遍く漂ひ終に
入江郷に至る樓の上に物あると沿て村民怪しみ此事を宦に告げ命を奉り
て是を上る其夜里人の夢に人あり甚形夜叉の如く頭に牛の角を載げ
て告て言く余は牛頭天王なり此里民正直にして誠あるを深く感ず故に

屋島寺

當寺本堂内陣之額曰
廣大智慧觀
右五字
邦君之御筆也

同様側之額曰
遍照金剛
三密行所
當都率天
内院管門
大通南谷書

衣の下に
まとひ
捨て
其中
果てれ
佛の
蓮之

尾張国清洲郡より漂流して此地に来る余るを祠を建て祭祀せば無病悉く除して寿命延長なるべし福とうべんと是より祠を建て祭祀し奉るかくて漂流せる所の甕を以て酒を造るに甚味い甘美なり是を呑むの皆悪疾難病を除くべぐ

甕底　右の甕を得て所なり敬て号く今八呂田圃の字とあまり

影向墳　牛頭天皇の出現し給ふ所なるべぐ今尚標を残せり

羊礼高松之松原　屋島の東南の麓にあり今八高松より志度への往来にあり

天慶元年伊豫掾藤原純友追討の大将として左衛門佐倫實下向備前国釜が島の合戰に敗軍し當國に引退き阿波介國風と語ひ此所に陣を取て純友の勢と数戰に官軍勝利を得て敵を討て甚しく純友の勢大に敗走して終に備前の国に引退ぐべぐ

佐藤次信之碑　屋島山の東坂十八丁下りて麓に往来の石の傍ら則ち此所を擅の流と世に呼べり是八義経平氏を攻め没し給ふ次信忠臣の五輪の石塔なり因るに後世に志しめんが為に建らる所なり

兆とぐ寛永年間　邦君此石塔の前に新に碑を建させり

石碑ノ高サ凡六尺　幅一尺五寸余　厚サ一尺　臺石高サ一尺三尺四方

下ハ切石にて壇を畳み築り　又次信の亡骸を葬る塚八羊礼村有奥に記ハ

次信碑文　此四字碑文上三並フ

維年壬午夏　我君受封讃州的為維城助確乎其忠貞真可観焉一日講武之暇泛蘭桨飛彩鷁吳歌越唱消遥屋嶋偶覧佐藤次信墳墓茲乃命下吏刊貞石建碑表義経貞於乎君之用意也深矣哉至矣哉次信受死于元暦之昔而銜恩于寛永之今矣其幸矣哉乃命余作碑銘逐昏如左曾若渠系譜載暦日月支跡操行旧記所載前史所傳歴々焉章々焉胡

贅余言

於皇次信兮挺干濵危之場酬恩致死兮百世誰曰不剛
過盤當錯兮顕干鏌之雄鋩識定膽壯兮誠依教養有常
尤可称者兮維夫在將之良建碑刊石兮遺烈山高水長
寛永癸未仲夏上院渉筆於高松城下依
大守松平右京太夫源頼重公命　儒臣岡部氏拙齋作之

安徳天皇社

檀の浦の濱邊ゝ

安徳天皇ハ高倉院の王子諱ハ言仁母ハ建禮門院平徳子太政入道清盛ゝ
娘ゝ治承二年十一月誕生同四年二月高倉院の譲ゝ受ニ歳ゝて即位清
盛夫婦准ニ宮の宣旨ゝ蒙る関白基通摂政後白河法皇ハ鳥羽殿ゝ幽居
ゝ高倉上皇ハ新院ゝ申せゝも政務ゝいろひ給ひ摂政も名ゝのみゝて天下
の支大ゆゝ乱ゝ皆清盛ゝ仕ふる其後養和元年清盛没後宗

盛ゝ継で政事ゝ行ふ是より前源頼朝関東ゝ義兵ゝ挙る九郎義
経奥州ゝ来ゝ加勢ゝ木曾冠者義仲信濃ゝ起る来ゝ所ゝ合戦ゝ
ゝて終ゝ平家敗軍ゝて都ゝひゝ引ゝ平氏の一族安徳帝ゝ守護建礼門院ゝ
清盛ゝ後室二位尼ゝ伴ひ福原ゝ逃ゝ落行是ゝ
ゝて京都ゝ高倉院第四の王子尊成親王ゝ位ゝ即奉り八十二代の帝ゝ後
鳥羽院是ゝ安徳帝ゝ西海漂ひ此屋島ゝ皇居ゝ故ゝ世ゝ西帝ゝ称ゝ
ゝ安徳帝ゝ先帝ゝ称ゝ此地ゝ来ゝて風二年ゝて遂ゝ長門国赤間関
ゝ至り永ゝ崩ゝ都ゝ此邊ゝ内裏の四跡ゝ伝ゝ云ふ社ゝ建ゝ

屋島内裏之古趾

天皇の社の南の方田圃の中ゝ一ノ鳥居ゝ柳樹木茂ゝて其跡残ゝ
寿永二年九月ゝ皇居ゝ焼亡後ゝ平家追討
陣ゝ戦ひ皇居ゝ焼亡後ゝ平家ゝ陣ゝ焼内裏ゝ

寿永二年九月平家西海ゝ漂泊の時菊池太夫纔益阿波民部成能ゝ此屋島ゝ

形の如く内裏と建て主上を奉り其余大臣公卿の家々も少し造り添らせ君を守
護し奉り其上使者を四国に遣し相觸るに一人西海に臨幸ありこの種の神器と上下
官人玉體を離さず奉らば今はかかる都もれ各々に従参賀して勅命を蒙べし
若忠盛の一人輩に豆賞るるゝん哉と披露せしかば四国の兵豆成能を下知し靡かれ
物憑りしく振舞奉る程に大臣宗盛殿神妙なるゝて何事も成能が計らひ阿波
守とおされ御氣色ゆゝしく見へて平家の心弱く思はれしも成能が申斐〳〵く
申し行ひるに依て暫らく安堵せられるゝぞ時永こと幸四月に改元有て元
暦と号し擁亮三位中将惟盛が故郷に雲井の餘所に成果て思ひと妻子を殘しつゝ
くに西国に落下て給ひたりしも晴れ思ひふむとぞ其身は屋嶋に在ぬる
心都へ通ひしに二月十五日与三兵衛尉重豆石童丸と云童船に心得る者とて
武里と云舎人此二人を具し給ひ屋島の館を出て阿波の国に赴れ給ふぞ

平家屋島の磯に春を迎へて年の始るとは雖も百元二の儀云吏宜しからず
主上御座のとは雖も四方拜も臣朝拜も小朝拜も節會も行はれば
氷の様も春に鶯も奏せば世乱れとは雖も都そ斯らるゝ物と哀
青陽の春も来りしかば花の朝月の夜詩歌管絃鞠小弓扇合繪合さと
くの遊覧有しに後は男女さゝ集ひて泣よう外の支そ哀れ
源平盛衰記
八月十五日屋島に秋も既に半ば成ぬと哀れ何に橘葉の露も置増つ
萩吹風も身に入て海士人の燃く藻の夕烟り尾上の鹿の暁の声いとれと催し
さゝねぬに秋の空に物憂く宿ぬる袖の涙の色付も心に佛に
いとゝ変る此春より後は越前二位の北方の様に波の底に身を沈むまそ
おそ無れども女房達の明も暮も臥沈流涙もいと臣顧故郷を思
之雲の外に心雋俄に九重之月前今夜名を得る月にまに人に限る

屋島山
擅之浦　次信之墓

次信の墓ハ屋島山の東坂十八町下りて壇ノ浦ノ此地と擅の浦とを此碑ハ寛永年間邦君の新たに建させ給へ

古宋公ハ張良が廟と脩一謝氏ハ古家と得て祭り先賢の微意偉人の翳然もるかのもんぞ夫

接ふ

次信が石碑の後に古ひた五輪ノ石塔ハ
是むかし元暦のむかし義経の建しと
ものいふ塔なるべし

空と称るふ左馬頭行盛かくぞ詠給ひし

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

と是と同る人〻涙を流しけるとぞ

洲崎ノ堂　手孔杯ふの此地往昔八海の汀なりし今八田圃となりて細き川とゝまり

本尊　正観音　弘法大師作　大師堂　本堂小並ビ　鐘楼　本坊　本堂の左の旁にあり

惣門之古跡　洲崎堂の南なりし屋島内裏の追手の門の有し跡なり高凡一丈余の柱と左右ふ建上ふ額木と入て門の形と残れる田圃の中なり往昔此所入海にして内裏と惣門の間遠遠なりしとぞ

源平盛衰記

大臣殿ハふ博士に清基とゝ者と御使まして能登殿へ伺られ給ふ源九郎義経既に阿波国蜂子の浦ふ着きしと同日定めて夜もすがら中山と越さよふらん御用意いるべし申されける去程ふ夜も明ぬ屋島より鹽干潟一隅てゝ民例高松とゝ所ゝ焼亡ゝ平家の人〻いまも焼亡〻と云れ共能申ゝ今ゝ

屋島惣門之趾　往昔此地八海の磯辺なりし故惣門ハ清惣門の丁ゝ

傳云平家屋島ふ皇居を定りて左右ハ高松の海濱ふ柵を構へ惣門を立て固とゝ然れども潮ハ朝夕に満干あつゝ常規なし干潮乃時ハ船ハ漕ふ出ゝ遠ざかり汀の柵ハ干浮て残つて源氏ハ固とゝ惣門ハ源氏ハ門戸し成て平氏の害とゝ城廓とかまへ人乃兼く慮ゝゝるべき歟

焼亡得たりけるゝ源氏所〻に火を懸て焼拂ふと覺へう敵六万余騎の大
勢とき〻御方折ふし無勢なり急ぎ御船に召し敵の勢に隨て指寄く
御軍いるべし侍ども汀小船と用意して内裏を守護して戰ふべしと糾し申け
き然るべしとて先帝と始め奉て女院二位殿以下の女房達公卿殿上人屋島
の惣門の渚より御船小勾る去年一の谷にて討漏されたる人〻なり前内大臣
宗盛前平中納言教盛前権中納言知盛修理大夫経盛前右衛門督清宗
ならび小松少將有盛能登守教経小松新侍従忠房已下侍も城中に籠れり
大臣どの父子八一船に乘給ひしかるが右衛門督も鎧を着て打立んとし給ひる
と大臣どの大に制して手を引き例の女房達の中へ入りしかるを何やらと無
慙なれ同廿日卯時源氏五十餘騎にて屋島の館の後より貴寄て鬨
声を發し平家も声を立て戰ふ判官八紺地の錦の直垂に紫巡の鎧小

鍬形打たる白星の冑に濃紅の縅なりけて二十四指たる小中黒の征矢に金作の大
帯に滋藤の弓真中しなり黒馬の太く逞しき白覆輪の鞍を置き先陣に進
んで馬に白沫かませ軍の下知しなりける
西塔武蔵坊辨慶判官に申ける平家の軍臆しなりけるに侍ども此方の斯
ひげに兵の小さと見なるを勢ひを戰ひなるかんと思ひ侍り此方に多勢小
見せ給ひしなりと申れば夫ハいなんと仰せられば辨慶こたへて小軍と以
て大敵とおもふなり此方と大軍と見せ侍るに火を用ひ益なしと高松乃
里の此方かしこに火をつけて家と焼こそ〻る八重〻の兵攻来るし思ひ〻べし申
れ共實さるこなりして敵の来べき道の辺に小伏兵をつくりおき高松の里
と焼小平家の方より仆候の兵を先〻にて伏兵發て是を追
かけ仆候此〻と注進に是とうて平軍大に驚き内裏を出る船に乘れ
しこそ此弁慶の謀ハ孫子に近而示之遠遠而示之近と云る意なるべし此
小而示之大なるべし

以上藤井氏の源平拾遺に委〻出せり

又曰能登守教経此時大臣宗盛殿に對ひて申されるは敵の兵多くも此地と云へ何
きの國と頼み侍るべき都と出し事とて數同悔とりひ給ふべきなれど其時は西国ふ
てし頼もふ思いつれど斯る形勢にてはもとり今舩にのりて海ふ浮ふも終は亡び
さきぬべし今般命ばかりは戦ひとくるり此方軍兵十人余り侍る上同の戦い
に勝負と咬せん義経が事は教経にまかせ給へ遠くは射おとし近くは組討に討とる
べし義経と教経侍らふ東の兵いかも猛くとも何程の事とかはんあ戦ひに勝ばと
も三百守りぬべく然るに教経ふ属へる兵の遠くも参て集りて心のまゝに戦ひ侍
るべし静かに給ひ軍を給へと諫め申されしかども宗盛殿聞られ給ひ
で舩に乗こまひしかば此教経の詞のごとく汁ひるが義経と討えんとも有ぬべ
くるれども大将愚にして諫めを用られず源氏の方大将も兵もかゝるとて君臣
一致にして故に勝利を得たりしぞ

那須與市宗高祈石　洲崎寺の北二丁余田圃の中にあり傷ふ標の石と云る

元暦二年二月廿日源平こゝに戦ふにて宗高扇の的をいるふ此石を目印にて
しるく諸神を祈りしぞ

同　駒立石　祈石の向ふ沖の方にて同時宗高ふ馬を立て扇を射たる一ヶ所
あるいはそれ石馬の足跡あり傷ふ標石と云る

那須與一宗高八下野国の住人那須太郎助宗が子十郎が弟なり射術を善
くして元暦の合戦ふ判官義経衆軍の中より撰出し扇の的を射た
む宗高兼りて則ち扇を射る海中に浮ぶ両軍ともに感嘆せり

源平盛衰記

源平互ふ甲乙あり両方引退き又たゝかんと仕る所ふ沖ふ在る船一艘漕
小向て漕寄る二月廿日の夏なれば柳の五重ふ紅の袴着て紬笠かぶる
女房あり皆紅の扇ふ日出しるを挑て彼ふ射よとて船の舳頭に立てかけて射
よとて源氏の方とぞ招ける此女房ふ建礼門院の后三の御時十人の
中より撰み出せる雅司に玉虫の前とぞいひ又は舞の前とも申ける今年十
九とぞ成る雲の鬢霞の眉花の顔雪の層繪書も筆も及びがた

那須宗高扇を射る

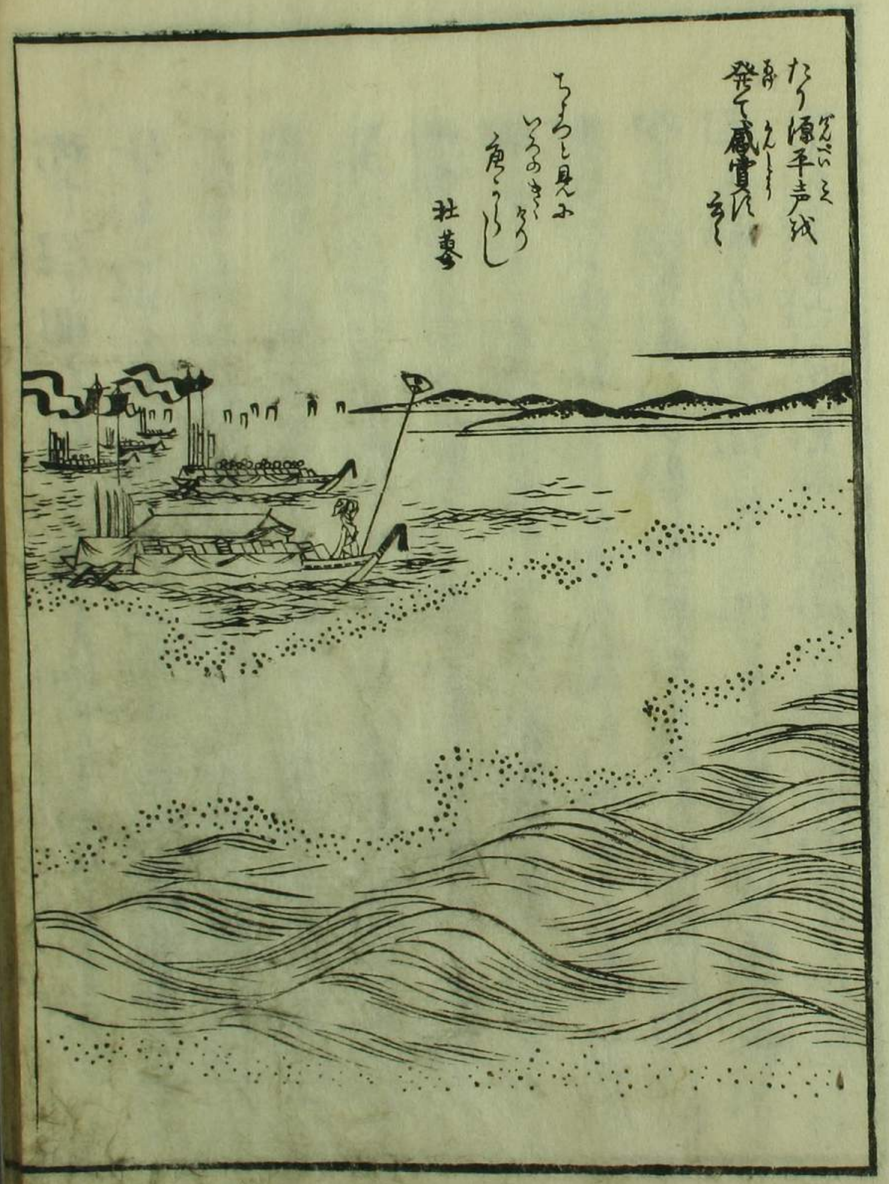
本朝通紀

宗高單騎うゝく
飾舟に望むに
疾風浪をうげ
浩清舟を繞む
宗高八幡の神ふ
祈る風捎く鮮る
是に於て鼓を
満て弦を發ち
鏑失長鳴〳〵
紅扇に中る扇ハ
雲を凌ぐで飛揚し
舩ハ空〳〵行清

なり源平声戎
発て感賞に
堪ず

ちらちらと見へ
いろのきく
角くうし

杜蓼



折ふし日小耀として最色こそ増さられ斯りなまバ西國さぐも石見せられ
たり事と出されく此弱と立てり此弱とハ故高倉院嚴島へ御幸乃
ゝ比千本切立く明神小進奉ひり皆紅ひ日出しる弱かり平家都と
落給ひ比嚴島へ參社ひり神主佐伯景廣此弱を取出しくられハ一人
の御絶へ明神の御秘藏ひり自ハ故院の御情帝業の御守たるべしなまバ
此弱と持せ給ふべ敵の矢も還て其身に中り候ふべしと祝言しく
進ぜひりると此を源氏射ぐべ當家軍ハ勝べ射負せ給ふべ
源氏ハ利を得るるぐして軍の石形ぞ立らまるる斯しく女房ハ
のひり源氏ハ遥に是と見く當座の景氣の面白さに目し驚ひ心と
迷ふ人者もあり此箙進ひ射ひ佛らまんと膽膽と作り難嗤と飲る者も
ひり剃官畠山を召ハ重忠ハ木蘭地乃直垂に撫縄目のよろひ着く大

中黒の矢負所藤の弓の真中ひり騨の馬の大逞しく小金覆輪の鞍おく剃
宜の弓手の脇小進出て畏く候ふ義経ハ女ひ愛る者ひ平家ひ云るる
斯構たるハ定めて進ひ出て聞ひの所と人ハ射手と用意して直中さひ當
て射落さんと徘徊と心得ひの弓射ひまんやと宜ハ畠山畏て君
の御家の面目と存ぐる上ハ子細と申ひ及ぐ但ひ是ゆ人ハ晴藝ひり重忠
打物取て鬼神ひ人も更ひ辞退申ひ地体脚氣の者ひる上小此頃馬
ひ振まて氣ひとさひ手ひ人ハ覺侍ひ射損ひて私の恥さる事ひく
源氏一族の御瑕瑾と存ぐ他人ひ御と申ひ畠山ひく辞ひる間諸人色と
失ひひ判官ハさて誰ひ有べと尋給ふ畠山當時御方ひハ下野国住
人那須太郎助宗ひ子小十郎光宗と加様の小物ハ賢く仕ひる候ふ樣
と召るべ人ハゆるし候ハぐも強ひ遠失打物ひぐのよひハ御蒙ふ

深く申切るさまゝ十郎ゝて名を赤揚の直垂に洗革の鎧小片白の胴二十四指たる白羽の矢に笛藤の弓の塗籠〻直中取清と下ふさ〻ろろげそ
そ泰〻る判官あの扇仕ろれと仰し御談の上に子細を申に及ばひとも一の
谷の巖々と落せ〻時馬弱く〻〻弓手の脇汗ぬ〻つゝぜて侍り〻〻矢合も
つゝ〻愈し小振り〻〻定の矢仕ろれも落せば弟て候〻子一冠者小
兵〻て侍をゝも懸鳥的ちどゝ〻〻希ろう定の矢仕ろれとなれ
仰下さるゝ〻〻と弟に譲つゝ〻〻引へろ〻〻無市〻て名れ〻〻其日の嶮裏東八絆
村絆の直垂小桃威の鎧奮鳥用及胴居頭〻て二十四指〻る中黒の矢負藤
の弓に赤銅ぼ〻の太刀と帯き宿赫白馬の太〻たくま〻に千鳥の飛散
たる具鞍おろ〻〻乗ろう弟法ぶと〻み出〻判官の前に弓取わと〻
る畏まりあの扇仕ろを晴乃所作で不覚とみとの〻子一

仰義ろう子細ふさんと云る所小伊勢三郎義盛後藤兵衛尉實基小與一と
判官の前小引居〻面〻の故障に日既小暮ろんに兄の十郎さ〻申に〻ハ
子細や有べき疾〻急ぎ給へ〻海上暗く成ぬゆ〻しに御方の大事ろう早
く〻とひろまぶ與一絨と思い胴とぶ脱量小持ぢ様鳥帽子引立て薄紅梅
の鉢巻〻〻手綱搔〻り扇の方へぞ打向いる生年十七歳色白く小髭
おひ弓の取やゝ馬の乗貌ち優ちる男に〻ぞ見へ〻ろ〻る波打際に打寄
て弓手の沖と見渡せば生上と始め奉て国母建禮門院北の政所方ぐ女
房達御船この數漕ろ〻べ屋形〻の前後に御簾も帳もざゝめ紙〻
袴温巻の壺まで也楊梅桃李〻飾られ〻ろ塩風に〻ふ虚焼小車の袖ぞ
通ふ〻妻手の中と見渡せば平家の軍將屋嶋大臣と始め奉て子息右衛門督清
宗平中納言教盛新中納言知盛修理太夫経盛新二位中將資盛左中將清

経新少将有盛能登守教経侍従忠房侍ハ越中の治良兵衛盛嗣弥七兵衛
景清江比田の五郎氏部太夫等皆甲冑を帯して數百艘の兵船を漕ぎ出
見と見る水主梶取に至るまで今日と晴しぞ振舞ふ後の陸を鎮まバ源
氏の大将軍太夫判官と始め畠山荘司治郎重忠土肥治郎實平平山武者所
李重佐良介能澄子息平六能村同十郎能連和田小太郎義盛同三郎
宗實大田和四郎能範佐々木四郎高綱平左近太郎爲重伊勢三郎
義盛横山太郎時兼城太郎家永等源氏大勢にて書と並べて見と見る
定の當りと知らざれバ源氏の兵ものく手とぞ振りなされバ沖も渚も推るべ
何もの所も晴と思ひろ甚所も遠浅なり鞍瓜鎧の菱縫板の浸るまで
打入れども佛文の馬もまバ海の中にてもろ〳〵手綱とゆるゝ〳〵鎧
ひれぐも寄る小波に物怖もして足もとぐ〳〵狂いろ荷のうもと急と見れバ

折ふし西風吹来つて舩ハ艫舳も動いつ扇拠つも〳〵孫ハ繰ものと廻り
ろ何の所と射べ〳〵覚ハ興ハ運の極めと悲して眼とふさぐ心と静めて
敬命項禮八幡大菩薩日本国中大小神祇別して八下野国日光宮都宮氏の
御神那項大明神弓矢の冥加有ハ扇と座席不定めて給源氏の運も極
もう家の果報も尽べくハ矢も放ハ前に深く海中に沈め給へと祈念して
目と開ひて見ろうれバ扇座ぐ静まる有繋に物の射ろハ夏山
の滋く緑の木間ろ僅に見ゆる小島と殺さバ射ること大事ハれ狭くて
立たる扇ひろ神力既ふさ副たもバ手の下ろ〳〵思ひつ十二束二秋
の鏑矢と抜出し九やろつ溢藤の弓握ぶ〳〵もろ打食ハ也能を暫
ら〳〵固ろうろ源氏の方ようろ今ぞ打入給へとひ七段ろろ也阻ろ
扇の紙ハ白と半たれバ恐をひろ暫ハ程とと志して兵どろろ浦

五飯山
八栗五飯山
洲崎寺
祈石
駒立石
安徳帝廟
内裏趾
スナヒ山
祈石
三ツ石
鹽ハマ
内裏趾
櫂ノ浦
安徳帝社

響くまでに鳴るまで鏑上一寸おしてゐつゝ射切らるれば敵目を驚
留まりて扇は空に上りつゝ暫く中にひらめいて海へさらさらと落ちる折ふ
しなれば日かたぶいて波漂ふ有さま誠に龍田の山に秋の色河瀬の紅葉に似
たりとも鳴矢ぬきて蒔ふ浮洲に覽へうり平家舷を扣いて女
房も男房もいつせに射うり感じけり源氏鞍の前輪を扣いていつせに射さ
ゝと感じたれば船もどよめきてぞ有る紅の扇の水に漂ふ面白さに玉虫は
時めきぬとや紅葉と見たるに芳野初花の驚かるゝ程ど

秘蔵聞諸

陣扇に二種あり紅白出しゝる扇は大将又は軍師より惣地紅にて日の丸ぞう金
なり又紅の日出しゝる扇は副将なるゝ惣地金にて日の丸ぞう朱にて書
しゝ然まば此時の扇は惣地紅にて金の日の丸を出しゝるべし

○此時判官大に感じて白鹿毛の黒鞍おいて與一に賜ふ弓失
しる身の面目誉まさと一時に施しゝ芳名を千歳に流せり

景清鞦韆之古趾　駒ヶ岩の辺りにあり今字を大名地といふ所其古趾なり〻〻詳なり

那須與一宗高の舟の的を射落し續て伊賀十郎兵衛尉家員を射倒し是も後
源氏船を扣いてどよめきも平家は是を本意なく思へば揖突一人弓取一人長刀
持武者一人都合三人小船に乗て陸に押つけ清水上りて揖と突向け寄りゝ源氏を招
く判官安からぬ変なり馬強なりゝ若武者ぐも馳すつて馳ちせ〻宜へば武蔵
国の住人美尾屋十郎同四郎同藤七上野国の住人丹生四郎信濃国の住人木曽
中次五騎つれて喚てかゝる先真ゝ進んでる美尾屋十郎が馬の左の鞦尽を
笠の藏ゝ程ゝて射ゝんぐる馬ゝ屏風とかへしぐ〻忽ちぐ〻倒るれば主
弓手の足ゝと馬手の支下り立て頓て太刀とぐ抜ゝるゝ又揖の陰ゝゝ大長
刀打ゝてかゝれば美尾屋十郎が小太刀大長刀に叶へじも思ひ切り見吹ゝ
逃れば頓て續いて追駈ゝ長刀にて薙んぐゝ見る所ゝ無して長刀とぐ

弓手の脇か狭く馬手の手と差のぐで美尾屋が冑の鍬と掴まんぐと掴まんぐと
逃るこ度つくく迎へて四度の度むづと掴む暫くで勘そて見てが鉢付の板よう
ふつと引切てそ逃さうる残四騎馬と惜くかけぐ見物して居くうる美尾屋
十郎八衝力の馬の陰小逃入て息つぎ居くう敵追くそも来ぐ其後冑の鍬と長
刀の先に貫く高くさへ上大音声呼て遠くう者音も聞け迫ぐ八目にも見ぬ是と
そ京童の呼ける上総悪七兵衛景清と名乗捨て御方の楯の陰へで除くもう
平家のもとへ行て少し地と直しう悪七兵衛討する者ぐも景清討とる續けぐと
て三百余人清に上て楯と雌羽に突ぐ源氏ぐに寄とやくてそ招さりくそ
此條普く人に知鑑そくぐも源平盛衰記に見ぐ只丹生屋十郎といふの馬を
射られて落ぐう所と景清長刀と額に付て飛でかける十郎ぐる思い逃げ去
ると道さどくく追も逃るも雷のごくく十郎希有に逃のびる事と書くう也近来
の繪本に此條を載たまぐも甚事實詳ならぐ

景清鞦弓

相引の入海に見ぐ鎧
川くもり平家の軍門八
田畑の中にのくる景清乃
勇戦のいくも又同ト

みとのやぐ鞦のいくも
七兵衛ガ
四ツ目をひく
撫のくら里

半端庵

東鑑に曰景清等平士憤之登汀戦美尾屋十郎等逆戦不利
又輔と引切る事ハ越中沿郎兵衛盛嗣能手をとりつて小林神五宗行の冑を打ちけ引倒
さんざゝに宗行頸を動さゞ双方へ引裂て鉢付の板より引ちぎり源平両陣乃
目を驚ゝゝゝいつる夏ゝ昼等の夏を取交へ附會せゝものゝ
大胡小橋太水練高名之古跡　祈石より六丁余西北の方にあり
小橋太ハ伊勢三郎義盛が郎等なり駿河国田子の浦に生立て幼少より童
川くゞて水練と得水底ハ一日も潜り歩く事と難しとせゞ源平ゝゝ合戦の
時平家方ゝ備後国の住人鞆の六郎ゝゝ六十人力の力持る大強の者ゝ
を宗盛下知して義経近づれゝゝバ組で海へ引入て隔てゝゝゝ遠矢ゝも射ろせと
て船に乗らまゝゝ松浦太郎舳ゝゝて屋島の浦と漕まゝゝ判官と伺ひゝ
此時小橋太是を見て兵の船に乗ゝゝ置ともせゞ漕まゝゝ直者ハ小ゝ当ゝ大
将軍と祝ゝ曲者ゝゝゝ人ゝ知ゝ焼肉裏の芝蕪池の陸ゝ裸ゝて犢

大胡小橋太水練高名

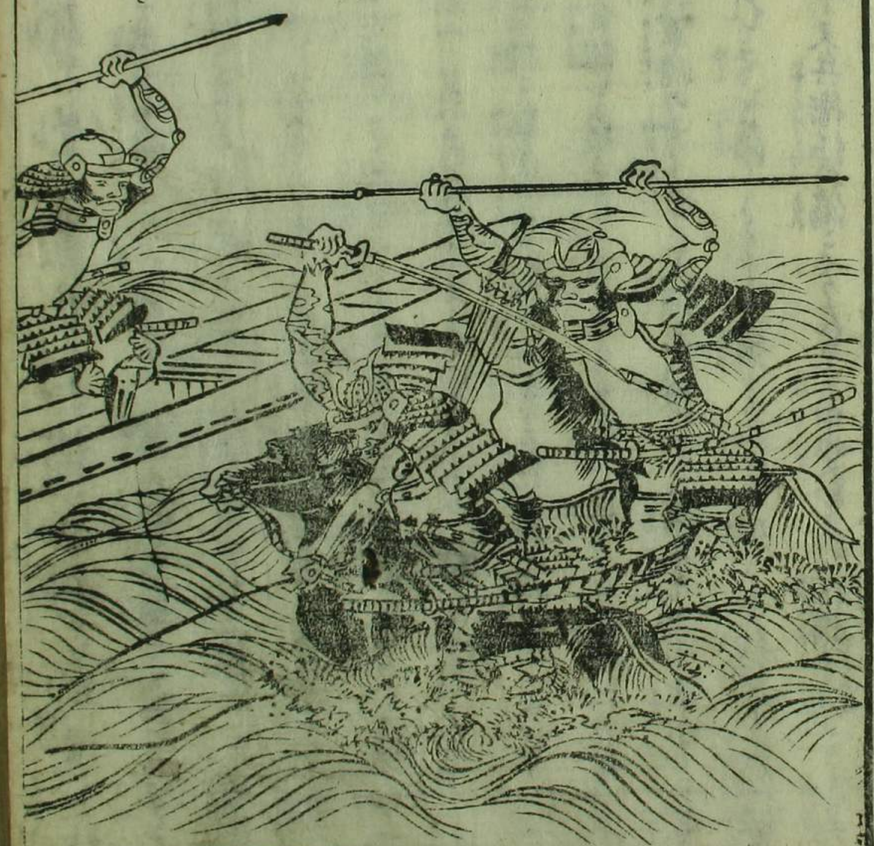
鷹ハ水に入く藝なく鵜ハ
山に在て能るゝゝゝゝ
六十人力と聞へ剛勇の六郎
ちまゝも小橋太が水練の緤ハ
術なく空ゝく水中に首を
かゝれなる体

雪の四ヨかゝる
ゝゝれゝゝ
杜美

義経握弓

詠歌尋訪五
條宅横笛吹
回一谷風壮
士勇名皆若
是九郎不失
楚人弓

羅山林先生賛



鼻禪と捶両刀と拝んで海へ入る御方も曽て是と志ざす楯六郎が舩に近づき浮
ミ上つて六郎が足と懐いて曳声とゞ〳〵海中へ引入る六郎も陸地へ上り十人の力〳〵
言れども水心得ぐり潜り深き所へ引入られ終に首を取れる小橋太六郎が頸
かゝり切て髻と口へくわへ水底をくゞりて御方の陣の前へ上る大将義経其思慮の賢
きを感じ給ひ兵庫作の太刀を賜ふ世静まつて後兵衛佐殿も武芸の道神妙之
〳〵千餘石の勧賞を賜ふ滅にゆ〳〵に面目なり

源義経弓流之古蹟　洲崎寺より正西二丁余ほどり冷ハ川とゝまり

源平盛衰記
平家二百余人舩十艘に乗揃二十枚つゝせて漕向へて旗を決て散〳〵に射流
氏二百余騎惠と並づて波打ぎゝ歩ませ出て是と射る矢の飛ちがふこゝハ降
雨のごゝ〳〵源平の叫ぶ音ハ百千の雷の響くに似たり平氏ハ浪に浮きたり源
氏ハ陸に扣へたり天帝空より降て修羅海より出て互ひに火焔剱戟を飛せ合

こ世休び戦ひも斯やうに覚へて無慙なる平家射掛けまて船にも乗うと成
判官勝おつて馬の太腹アぐで打入て戦ひ〻〻幾中の治郎兵衛盛嗣折と得う
と悦びて大将軍に目とうけて能手を下し判官とかけんと打うけうと判官
鞆と頭ふけて懸らをしくと太刀とぬき能手と打のゆるくとる程に服捻
なる弓と海にぞ落しける判官ハ弓と取て上らんとく盛嗣判官とうけて引ん
とくとよく見へれば源氏の軍兵ひれ如何に其弓捨のくと声〻
申れども太刀と持て能手と會釈ひたの手に鞭と取て掻ぬきて戻る軍
兵等ぞ従い金銀とのべくるうるくも恐毒ぞ皆ぞ給ふべく幾猿〻
申れば判官軍将の弓〻てこ人張五人張るくバ面目るべく去ども平家
に貴ぬ弓ふれて弓と落しうるくて彼〻此〻強〻ぞ弱〻ぞ披露
んと惜かるべく又兵衛佐の漏さうんも言甲斐なれば相構て取うと宣

盛嗣宗行が鞆と引切る
源平盛衰記
景清美尾屋の鞆引〻
るものゝ盛嗣宗行が
鞆と能手うて引らとし
う〻景清の事と後人豊
清ぞ作〻〻よのもくん
う景清の條世
名高く盛嗣
宗行がこハ却
つて知る人少〻

実の大将なりしと兵古とあるひろ

○此時小林新五景行と云者ありて越中治郎兵衛盛嗣が熊手を以て判官を取んとすると大将軍とかけさせ給へとて後ひて漕ぐせしかるに上へ上へひろんばかり盛嗣判官とうけ給へとて安らかに思い漕ぎ舷に乗うつ指よりて宗行が冑の吹もの〳〵に熊手をとらせ打うけ曳〳〵音をいぐ〳〵て引く宗行馬の前輪につき取ほさせて鞭をうつ主も究竟の乗尻なり馬も実に健うつ水小浮づる小舷うれば汀へむかひ舳浪つかせてざんざめひてそ引上るる宗行熊手にかけられる〳〵馬より飛とう少し足を踏入て頸をのべて曳〳〵引るる盛嗣も大力宗行も勇士なれば金剛力士の頸引のべ覚へ勝劣いつまとも見へざりるが両方はらはらとふに鉢付の板ふつと引切鉢ハのこりて首ハ引ひつ鞠熊手に留まれ盛嗣舷と漕ぐ宗行ハ陣に返り入源平ともに目を澄し敵も味方も感嘆ぞう判官宗行を召て只今の振舞凡夫に見へず鬼神のはたらきうつて銀にて鍬形をうつる龍頭冑を賜る此冑をハ源氏重代の重宝也銀にて龍を前に三後に三左右に一ツ〻打られば龍に名付く保元の軍に鎮西八郎為朝の着給し重代の寶なれども命にかへんとの志を

感し強刀のあるまし神妙なり〳〵是と云て宗行家門の面目〳〵かゝるあるべき項なるる

困にて古ハ冑の鉢ホとう釘のとがりのとうち矢ホ鞠と掛そゞ〳〵せ〳〵ものろう源平合戦に引切るも此折釘とす切〳〵もんう今の糸威の冑ハ〳〵中〳〵容易ハ切〳〵かるべ〳〵ト秋齋閑語ホ委〳〵く着せう

黄牛崎　内裏跣よう東南一丁余にあり今赤場崎〳〵此地ハ屋島の城の候口なりと元暦の合戦に後藤兵衛實基屋島の内裏を焼んとする時海ノ浅深を試んとて妻の牛を海に追放しが其中にて黄牛一番に渡りて向ふの岸に上りしを以て安くとう又牛の角に松明を結ひつけ海を渡らし軍兵の勢ろる様に見せしと屋島寺の什物ある源平合戦の画圖の懸物にあるハせり

佐藤次信墓　洲嵜寺ようこ丁許南往来の傍にあり亡骸をもつて葬るとぞ云へ矢に中りて死〳〵る地ハ是より二丁許北田圃の中に射落田〳〵に字地あり

墓初ハ西の傍に有しが後年ろに堤を築くふようて今の地に移せり其時土中より次信の太刀七塩出せり妖るふ其霊甚し〳〵崇とあるを志渡寺に奉納をとゝ

傳云人皇百一代後小松院至德元年四月五日奥州住人佐藤の一門空信といふの僧此
地に来り次信の石塔に結ぶ追悼の和歌と絵ば
痛はしや君の命とつぎ信ぶまつる石ハ苔衣きて
空信一夜此石碑の辺りに宿りける其夜夢中に次信の霊顕まつ
惜むもよ今と落ち分とれてこそくれとづぎ信
ふ涙こそ一書に八信空にのり何きぶ是ある武まつ
佐藤次信忠心伝兄弟ハ大職冠鎌足公の末裔奥州信夫庄司佐藤元治ぶ二子あり
兄を二郎兵衛次信といふ弟を四郎兵衛忠信とつふ共に鎮守府将軍秀衡ぶ臣ぶ
源義経兵を起ハの時秀衡二士を以て義経に属ハ兄弟東奥にて強て所く
の攻撃弐功あ〜ぶといふ事なり然るに此屋島の戦ひ源平雌雄を爭ふ次信
羣を出て大将の矢表に進み教経の矢とりけ〜此に死ハまつ

判官の乳母子奥州の佐藤二郎兵衛次信八黒革威の鎧に着こうるが首
骨と射貫れ真逆に落ちると能登守の童に菊王丸といふ者あり本八
通盛の下人なりしが越前に信討きて後其弟ろんばくて此人に属さうぞ
萌黄糸威の腹巻に左右の射鞠さして二枚胃に着おし太刀を抜て飛
でかり次信が首を取んとする四郎兵衛忠信を留り引固て放つ矢に菊王丸が股
巻の引合せつと射貫められて一足も引ば覆に倒る忠信が郎等に八郎鳥定小
長刀を以て用ひて童が首を取んとかるる能登守童が頸を取まじと太刀を
打ふつつとはり童が手をとり引立て曳声を出して船にもげ入る暫
し八生べくも有らんと余りに強く投られて後音もせざりしが忠信八此間
に兄次信が肩に引かけ泣く陣のうちに負て入こうり判官ちかく居ら

給ひ如何に次信かく義経ちかいの一所にてとこそ契りしに先立るこの恨
さらにうも後生とに吊ふべき冥途の旅心安く思ふべし備も何支とう思ふ言あく
うと宣へども涙と流に付て是非の返事なし判官うつて汝心が有がて
涙とぞ流すめ猛き兵の矢ひとつ中つて生ながら言つてさる武八ある左
ずの後きたる者くに存ぜざるものと今一度最期の言聞せよと宣へば
信息ふそ少しまに若げて息の下に弓矢取身のあひなり敵の矢に中
つく主君の命に替る八兼くに存ぜる所なれば更に恨こうべ只思ふ支そ
老る母とも捨てこそ親しれ者ども別きく遠に奥州に属奉つ七心八
平家と対亡ぶして日本國と奉行給んと見奉つんと存せしに先立て
まつる対りこそ心にかかり侍ら老母が歎ども労しと申しれバさも
猛き武士なれども判官もいとどと流し給ひる實に思ふ

も理なり敵と亡ぶさんこゝハ年月汝経べくゝ汝義経世こゝのゝバ汝兄弟と
ゝそ左右小立んと思ひつるゝゝく手に手と取合せて泣くバ次信ハ宛嘆
と其と最期の詞こて息絶るゝそ無懇あれ此と同ゝ兄ゝ弟ゝも戰
の袖と絞こゝゝゝ

義経乘馬太夫黒之墳　次信の墓の左の傍の前に操石と云て太夫黒馬埋所ト勒ス

元暦二年二月廿日源平屋島に戰ふの時既に紅日西ふ傾けるゝ八郎等の内こ
て四天王と稱せ鎌田の藤次光政討死佐藤次信ハ能登守教経の矢先ふ中
ゝ死たゝゝバ義経只管悲嘆給ひ此日の軍ハ是こて止ん武例高松の柴山
に飯こ給ひて其邊りと尋ゝて僧と清墨ゝゝ馬こ金覆輪の鞍と置
申ゝる心静ふゝバ懇ゝこて申べゝれども斯る折ふゝうれバ如此馬鞍と以て御房
庵室こて率都婆経書佐藤岳衛尉継信鎌田藤次光政と回向こて後世と

吊らひ給へて舎人に引せて僧の庵室に送らせるとぞ
此馬は始め安部貞任が乳黒の末にて黒の少し小さきを早き者の
一物ひろ妻の馬の中に鎮守府将軍藤原秀衡ひそかに秘蔵をりをるを剃官
奥州へ進発の時進らせける馬にて始の名は佐墨とぞ既に宇治川と
も渡し一の谷をも落せしに一度も不覚をとれざりしかば例と言ひて剃官五位尉に
成る此馬に乗たりし時は改て太夫黒と号しかりし時も身を放さじと思ひ入けり
れども世をば継信光政の悲しさに中有の路をも乗うつしてとぞ兵ども是
を見て此君のさろ公命を失はんと惜しみぞ留めける然るに此馬夫にして絆
を喰ひ切て草庵に入べき厩もあるべきなれば鴨部村の極楽寺に送る此時後
信を埋みし墓の前を通るに勿ち舌を喰切て倒れ死にけるとぞ畜るい
なれども忠義を一に死を次信と一にする支感ぞ絶なる是に依て山

地に埋みて塚の標を残せる時に寛永二十年癸未夏邦君是を憐み給ひ此所に
を建させのたまへる　碑文銘ホ八ハ一名八拾遺の篇に出ル

東鑑曰廷尉家人継信被射取畢廷尉大悲嘆堀一口納衣葬千株松水以祕
蔵名馬賜件僧ト云ヘリ

武例高松柴山　継信の墓の後の堤より東の方ホトリ池の向ふの柴山あり土人源氏が岡
是則ち源平盛衰記に武例高松ヘ柴山に帰り給ひて云古跡なり又平家
八屋島の焼内裏に陣を取る源平両陣の間二十余町を隔てり
前に義経此在家を放火し屋島の内裏を攻るに則ち此傍の在家なり
武例今も尚年礼村と称ス高松八今鎮城の名に称する故古高松ヘ今
の高松ヘ八別所ひろ思遣べし
武例高松の間にて義経の考へ言を聞ハ平家を追討ハ討べしされ

ゝ敵此方の兵の少れを見しりて有て二手ハ先陣ゝゝ殘る兵
後より漸に来らしむゝ余せ源氏の兵弱く加りうたるゝと思ひ疑ひて
此方の勢ひと得ん〻言ひ〻余せ〻れと是ハ考へゝそ有る小ゝ軍ハ
弱に揉に見せ〻して勢ひと得て以上凡千拾遺出

凡生山　源氏ガ岡の東にあり同陣所の古趾なり雨龍山とも云

鞍懸松　飯来村の街道の傍にあり今樹下に小堂ありて地蔵尊を安に義経の鞍をかゝる所

義経阿波国蜑子の浦に著し勝浦勝宮と歴て阿波し讃岐の境なる中山
の山口に陣とゝり翌日引田の浦入野高松の郷とも打過て屋嶋の城へ押寄け
るに盛衰記見へゝり此時此ゝ休ゝひ乗馬の鞍を松かけ置て馬と休ち給ひしと云

榮松山喜岡寺　飯来村ありて高松左馬之助ガ居城の趾なりゝそ

本尊　不動明王　霊験奇瑞ありゝ所ゝゝ拾遺の篇に出ル

高松左馬助墓　庁山志摩守墓　唐人彈正墓

右石碑三基本坊の後に並べり墓前に石燈籠を建る

喜岡之古城　則ち右喜岡寺の地なり高松左馬助と山唐人とそれぞれ二百余人ゝゝに付先に

南海治亂記

天正十二年四月浮田八郎秀家備前美作の兵一万五千人其余六人の兵将
二方二千人を以て讃州に發向し四月廿六日に屋島の浦に到着し北の峯に
旗を押上ゝゝ国中の人民ゝを見ゝ騒動する事ハ針もし北の峯ハ分
内狭迫して兵を留めがゝれ故に南の峯小侵る此山ハ上代の名城なれと
も山高ゝゝく戦ひとるに用ひゝ其日下山して年礼高松に上りゝる
爰ハ喜岡の城ゝゝ小城にして高松氏世しの居城なり香西伊賀守ガ旗
下なれば加番して唐人彈正と山志摩守と兵時ゝして百余人指遣に高
松左馬助ガ百余人ともに二百余人を以て城を守るとゝ

金六ノ四十四

夫来此城堀塀堅固なりしかども二万余兵天地と響かし攻寄る事なほ終ふ
防戦をなすこと能ハズ二百余人に残らず此に討死しぬ
其後生駒讃岐守一正當国を領し給ふ唐人彈正の男剣右門七百石を
て召抱られ元山志摩の男九左門百五十石にて召出されしとぞ

平家蟹　屋島の浦よりいづる其形ち甲に鬼面あり怒るがごとし土人云平家の勇士戰死の霊魂化せるところなり全く好事者の附會なるべしこれ諸所にいづる其名と異なり

本草綱目云蟹之小者名鬼蟹食之害人と則是也

兵庫及び明石の浦の鬼蟹八俗称ず武文蟹と甚大なること尺に近し元弘の乱に秦武文摂州兵庫の海に死ス故に号く享禄四年細川高国と好ず栃州に戦ふの時細川の家臣嶋村何某歌二人と挾て尼寄の水中に没死ス故に尼が崎の浦に生ずる小鬼蟹と俗呼で島村蟹と曰其大さ三寸圓くして脚の矣鬼面のごとし

凉菟
玉鉾
養山

生海苔もまぜて流石に平家なり

蟹のうしろもかくれぬ八幡の虫付状

蟹乃目ハ月冴かゝる屋島哉

神櫛王之墓　太夫黒の塚の上の方ハいづれ土人王墓又大墓青墓もどゝ云つり又王墓山と云陵あるべしん

神櫛王八人皇十二代景行天皇第十七王子にして當国を領し給ふ故に屋島山に宮を造りて住せ給ふ薨ずして後此所に葬るゝ又神櫛王の御舘の趾〻〻字に王屋敷といふる地いづれ是ハ惣門より二丁許東の方なり

長刀泉　王墓より二丁余南田圃の中にいづる往昔武蔵坊弁慶長刀の石づきを以て穿ち井をうゝ云叢に埋むゝるも至つて清泉なり名切水とも云

菜切地蔵　同所の山の上にあり此辺をゝて源氏方野陣の趾にして右長刀の泉をもつて兵糧と調ふ此石地蔵を倒して精盤〻〻長刀にて菜を刻みしゝゝ故に後世菜切の名と業らもゝゝ且君臣鉞もの謂なり

土人口碑に残まるを以て次に著ハす

義経ハ
陣を張る
武蔵坊辨慶長刀一本にて地と
穿ち水と出して汁をとりの石の
地蔵を倒して真菜板に菜を
刻みて汁に和し判官にすゝめられば
義経たいらぎて
弁慶ぶ器了汁ハ武蔵坊
トのゝまれば弁慶ゝゝ
左右ハいひけ
ゝ弟判官

六ノ四十六

六萬寺之由趾　辛礼村にあり

當寺八皇四十五代聖武天皇の御願にして國中の民庶六万余戸の力を合て
建立せり伽藍ありて壽永二年の冬平家の一門屋島に来り籠城のゝち平家の
一族経通房阿闍梨祐圓本三位中将重衡但馬守経政此寺に入て止宿し海中に
疲労を休めゝれ時々和歌を詠ず佛殿の内陣の戸に自筆にて書附年号
月日まで結置きしとぞ

蜂にも遠山寺にあり○来て後乃浮世とゝしにけるの邪　捕中納言重衡
いざゝらば世山寺に墨染乃衣はそでと流ゝ涙ゝん　経通房祐圓
世の中ハ昔語にぬれもど紅葉は見し世なりけり　兼但馬守経政
元暦二年佐藤次信戦死の時兵器を此寺に納む又源九郎判官鎮守明神祈願
の願文あり元徳年間高松二郎本地堂十王堂鎮守宮権現祠を建立ス貞

治年間細川頼之金堂佛像ホと修補ハ蓋先将軍御菩提と吊い奉る為ろう
〻ぞ又拾春境内の竹木と伐禽獣と殺ともに禁ぶる標と立る永徳元年寺主
善観僧都阿讃の衆僧と勧進して伽藍と修理ハ法るハ天正十年長曾我部
秦元親當寺ハ宿陣〻其古き物語と聞て又畳一感〻往古の人ホ遇思地ぜ〻る
〻て珎勝ホ思ハ〻ろ〻ぶ翌出立〻て志渡の浦一趣き泉の大町と過る時分
此寺焼亡ハ元親志ハ〻驚られわきて〻も遠く隔てわきバ為方なく其所一馬
と留め〻出火の巨細と乱されぶ撫汲の下部ぶ業ぶり元親是と憤ふて
彼下部と斬り首浅四本竹ハ〻けく罪の礼と立て通られ〻ぞ此時霊宝
什物の〻ハ焼失〻今ハ〻ぶ其名の〻残れり尚今の緒堂ハ後世再建す
る所〻〻往古の跡と廢せ〻ぶりの〻ろう當時の堂舎の図ハ〻ハ〻〻後
篇一出ハ

天正十年十月下旬長曾我部元親ハ阿波國大西白地の城ハ帰つて伊豫讃岐路
桑の緒特交代て平木の城の在番と勤む其時豫州の五将海路ろう往来一
て屋島の浦ハ舩〻りハ年礼六方寺の焼跡ハ鐘撞一宇残て〻ぶ此鐘と
取て豫州一飯り石槌山前神寺の梵鐘〻ハ其鐘の銘分明〻〻〻今ハ存せり
六方寺の伽藍たること推て知るべし
或曰屋島年礼高松志度の浦陜間巌窟の境〻て繁栄の地〻ハ何の故
と以て伽藍高大ぶること〻ハ〻ぶ答て曰伊豫讃岐ハ海濱浅〻て船ハ〻
〻く此浦ハ山間一八〻と一里〻て海底深く数千の船も繋ぐ一是と以て繁富
ハ古と今と異ろう當時と以て較るハ〻ハ〻ハ代ハ遣唐使と立て緒越一法
則と受次〻我國の法則と立給ひ朝廷二百官職掌城備て天下の政道と
分明に執行ひ〻ハ凡民ハ内圃お阡陌と分つ〻租税収納せ〻む故ハ山田

郡に阡陌と立て王制の基本とし是に依て此浦繁昌して其名高し年れに六万寺
あり庵治小万貫寺の一万貫寺の両基僧一人一銭の助力と勧め百万人の財を受
て建立しる寺るる故小万貫寺しらるる時去り世久りて寺院断絶とても
も名のみ残りて王代の餘波と寛文年中年礼の村長中村某しる者草廬
と六万寺の蹟に造る燧山の律師と招居して菴主とし邦君あれと美をひて
六万寺山と寄附して昔の跡と後世に垂ゆるとて老父夜話記に見つる
南海治乱紀纘州浦島下知之記云
應仁元年夏細川勝元より御教書と下し給ひて濱州浦島に徇知せれ
て曰今度防州凶徒有渡海之間當國浦島之諸人堅守定法不可為海路
之禍殊至海島之漁人者召集于本浦可令安居也海邊之頭人等當業知
應仁元年五月日判　右國中の諸將出陣の時海辺と守る浦長に先引

田に本松寒川領也小早島屬之津田志度八安富領也屋島香西八香西領也
直嶋塩飽島屬之宇足津御世所八奈良領也多度津観音寺八香川領也
笘水崎屬之各守護の兵有て其浦と守管領家の命と受行ふ也又豫州能
島兵部大夫と云る飛船と立めて曰今度大内家河野家の軍兵吾命に依て
上洛せしむる所也軍兵甲乙人乱妨と禁止八船中雑用八價と少て償之押買
と禁止八船頭人役者の外船中之人衆上陸と禁止八海島諸浦の人等宜知
之也と制札と出して浦長に遣し通船に故に海辺も騒動せず通船計憂
もなし是彼我共に公儀の役にて私にいとぐる事と示八者也仁政と云べし城
の道と行ひて人智ぶらる事なし是故に洛中に敵し成身方と盛て戦ひと
挑むとも海辺の地下人俱に財貨と通用して何の煩労もなし云々
右の條八此地に拘りぐる事とぐも浦島の因とよりて也

是ハ次て八栗五剣山の霊場と始め志度の浦の古跡志度寺の縁起海士の物語より長尾寺燧山霊之寺及び津田の松原鶴羽の濱白鳥ヶ神社大窪寺畫寂の樓小簑の瀧佛生山虹橋一之宮瀧の宮中間の天神六妻山其余此編に洩たるもの多し〳〵著一且西讃小松尾寺雲邊山又ハ古城乃跡古戦場の軍伝ハ悉く圖繪と加て後篇〳〵嗣〳〵出し者也

曉鐘成謹誌

金毘羅叅詣名所圖會巻之六大尾